

留学・研究計画書

氏名 浅村 卓生	留学機関名 ウズベキスタン科学アカデミー
留学先国名 ウズベキスタン共和国	留学期間 西暦 2003 年 10 月 ~ 2005 ²⁰⁰⁴ 年 9 月
研究テーマ (留学目的) ソ連邦期中央アジアにおける言語政策と文化形成 —ウズベク語制定をめぐる—	
研究テーマ (留学目的) の説明	
<p>ソ連邦崩壊後に独立した旧連邦構成共和国では、ロシア連邦内の共和国も含め、歴史の再検討や宗教活動の活発化といった民族復興の傾向が顕著である。独立後のウズベキスタンでは特に脱ロシア化・ウズベク化政策が目立ち、文化の面でもソヴィエト的・ロシア的なものとウズベク的なものとの峻別がなされる傾向にある。しかしウズベキスタンという共和国の枠組はソヴィエト時代に決定されたのであり、近代化の中で醸成されたそれらの文化的諸要素が本当はどちらを起源とするのかということをも明らかにしてもあまり意味はないと思われる。むしろソヴィエト期を通じて「ウズベク的な」ものがいかに定義付けられ、また創造されてこのような事態に至っているのかという経緯をこそ提示する必要がある。モスクワと各共和国との関係はいかなるものであったのか、ソ連邦期中央アジアにおける民族政策がどのような理念のもとで展開し、当該諸国でいかに実践されたのか、またそれらが現代の動きとどう結びついているのかという問題を再検討する必要がある。</p> <p>1924-25 年に政治的な駆け引きと妥協の結果として国境が画定された当時のウズベキスタンでは、ウズベキスタンという国にいる、または国籍としてウズベク人であるという認識は希薄であった。民族的にも多様であったウズベキスタンにおいて、国家的な均一化を担ったのは行政機構の整備、交通網の発達、出版制度の確立といった近代化の諸制度であり、何よりもウズベク語という標準化された文章語の制定であった。20 世紀初頭において中央アジアの文章語は混乱状態にあり、主に「共通トルコ語」「タタール語」「チャガタイ語」の三つのトルコ語が使用されていた。このような中、汎用性の強い共通トルコ語に基づいた文章語が目指されるが、結果としてタシュケント方言をもとにトルキスタンに固有なチャガタイ語の伝統を踏まえた新しい文章語(ウズベク語)が作り出されることになる。</p> <p>そこで本研究では、文章語が制定されることでいかに国家概念が醸成され、近代国家を現前させてきたのか明らかにすることを目的として、なぜ共通トルコ語が選ばれなかったのか、またボリシェビキ革命の時期にはほとんどの使用者が文盲であった「ウズベク語」がいかに専門的・抽象的な語彙を獲得して他のチュルク系諸言語との差異を深めて普及していくことになるのかという問題を論じる。そのため、当時の識字率の変遷を詳細に検討するとともに、識字教育を担った教科書や啓蒙雑誌・辞書等の文献、さらには言語芸術としての文学作品の検討を通じて多角的に新文章語の浸透の過程を追い、当時の社会で新文章語が担った役割を検討する。さらに、なぜ 19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけて日本を含めた多くの国々で文章語改革が行なわれたのかという問題についても、日本語の研究を視野に入れてより汎用性のある結論を導き出したい。</p>	

成果報告書

記入日 2005年 4月 15日

氏名 浅村 卓生	留学先国名 ウズベキスタン共和国	所属機関 共和国科学アカデミー言語学文学研究所
研究テーマ：ソ連邦期中央アジアにおける言語政策と文化形成 ―ウズベク語制定をめぐって―		
留学期間： 2003年12月～2005年3月		
<p>○研究の概要</p> <p>私の研究は現代ウズベク語の標準語化に関するもので、ソヴィエト時代の中央アジア文化・言語政策の特質と、その時期にウズベキスタンにおいて形成された「自国」文化が独立後の現代にどのように関係しているかという点を言語の面から明らかにすることを目的としたものである。</p> <p>留学中は科学アカデミー言語学文学研究所に所属した。研究員という地位を与えられてアカデミー所属の指導教官の下で研究することになったが、しばらくするとこの研究所にはソヴィエト時代の言語政策問題を研究している人はおらず、驚いたことに一般的にも公用語であるウズベク語の変遷について詳しく知っている人は稀であることがわかった。ソヴィエト時代には政治に深く関わったり当局批判と見なされたりするような研究はタブーであったが、独立後の現在でも学術研究は強大な権限を持つ当局のコントロール下にあって、政治はもちろん、自国の文化・歴史研究に関してもその領域が非常に統制されているのがその原因である。特に、ソヴィエト時代に関する研究については独立前までは評価されることのなかった当時の現地知識人の活動の研究が奨励されており、他の研究は限定されている印象を受ける。政治的な活動や私のテーマである言語政策等のソヴィエト民族政策に関わる問題は、ソヴィエト時代同様に現地ではかなり扱われにくい領域であるとともに、先行研究の蓄積の薄い分野であった。そのため、留学中の前半は公文書館・図書館を中心とした文献収集を通じて歴史的な事実を詳細に把握することと、少ないながらも散見される先行研究の追跡に努めた。後半は現地人研究者たちとの接触を試みて、ソヴィエト時代の言語政策研究がこれからどのようにウズベキスタンで取り上げられていこうとしているのか、またどのような評価を与えられているのか知り、その研究が現代の文化政策といかに関わるのか分析することを試みた。</p> <p>そのような意味で、留学中に10日間という短期とはいえ、ソヴィエト連邦時の政治的文化的中心であったモスクワを調査訪問できたのはありがたかった。モスクワの東洋学研究所では当時のソヴィエト言語政策を専門にしている著名なチュルク学者 V. M. Alpatov 教授とお会いして、ロシアでの研究動向についてお話をうかがうことができた。また、ウズベキスタンでは散逸してしまっていた資料をペテルブルグ国立図書館で見つけることができたのは大きな収穫だった。</p>		

○標準語としてのウズベク語

現在のウズベキスタンの諸方言は、普通大きく分けてチャガタイ（カルルク）方言、キプチャク方言、オグズ方言の3つに分類される。このように多くの方言が交錯するウズベキスタンにおいて、いかなる言語が選ばれ、どのように標準化されていったのかという問題はたいへん興味深い。私の研究テーマもこの問題を出発点としている。このような問いに答えるものの中に、人口に膾炙した定説として「ウズベク文章語は音声がタシュケント、形態はフェルガナ方言が基になっている」および「1930年代に文章語は完成している」という言説がある。しかし資料を読み進めるうちにどちらにも再検討の余地があることがわかった。例えばペルシャ語の影響で残っている「h」と「x」の発音の差はタシュケント方言では区別がなく、ペルシャ語に近いタジク語話者の多いサマルカンドやブハラ方言から来たのは明らかである。形態論についてもフェルガナ地方ではないキプチャク方言の接尾辞が存在するし、標準語に見られる形態素はフェルガナのみならず他地域でも共通しているものが多くある。このような反例は枚挙に暇がなく、単にひとつまたはふたつの地域の方言を基にウズベク標準語が形成されたという主張はかなり強引で無理があるのである。

○現代のウズベク語

それでは現在のウズベク標準語とはどのような言語なのであろうか。留学中にはさまざまな形でウズベク語の学習機会があったが、初めの半年は手探り状態であった。というのも、外国人に対するウズベク語の教授法を会得している教師がいなかったからである。アカデミー所属の研究者をはじめ、自分はウズベク語を教えることができると主張する人は多いものの、ウズベク語を話すことができるというだけで実際に教えること、特に文法をゼロから学ぼうとする初学者に対して体系的な説明のできる人は一人としていなかった。当初、これは運が悪いだけであっていずれよい先生が見つかるだろうと軽く考えていた。しかし書店で独学書を購入して学習を始めてみると、明らかに必要な文法事項を網羅していなかったり、導入順序が整理されておらず難易度も場所によってまちまちであったりするものなどがほとんどで、どの独習書も全く使い物にならなかった。ここに至って、ようやく一般的なウズベク語の教授体系そのものが今に至るまで未整備であるということに気がついた。

こうしてみると、ロシア人やタタール人など、ロシア語を母語としていてウズベク語を学校教育でしか学ばなかった人たちが卒業後もウズベク語をうまく話せないのに対し、ロシア語を学校で学習したウズベク語話者がロシア語を流暢に話せるようになる理由も同じではないかと思われる。ウズベク語話者がロシア語を話せてロシア語話者がウズベク語を話せないのは、①旧宗主国の公用語であったロシア語の話者のウズベク語軽視、②ロシア語を話せる方が出世に結びつくという学習刺激の差、または③学校教諭の給料が非常に低い水準であることによる教員の意欲減退などがこれまで理由とされてきたが、それだけではなくおそらく高いレベルのウズベク語文法解説書および教授法の欠如も普通教育で非ウズベク語話者がウズベク語をマスターできないかなり大きな原因となっているはずである。実際に初等・中等教育におけるウズベク語教育は詩の暗唱などが中心であり、文法教科書も伝統的に古い時代の小説などからの引用が多く生きた口語を扱っていないという問題がある。独立後になって盛んにウズベク語学習の教科書が編まれているのは、ウズベク語の文法研究や方言分布研究などがソヴィエト時代に重要視されてこなかった反動でもあると言える。さらに言えば、首都タシュケントにおいてさえ標準ウズベク語を話せる人は一部の専

門家を除いて皆無であり、ほとんどの人が方言しか話せない。テレビやラジオの放送も標準語が建前になってはいるものの、方言で放送される場合も少なくないのが現状である。

実はこれは文章語に関しても同様で、ウズベク語の文章における現代標準言葉遣いの中で、口語的かつ安定した意味を持ち、共通した了解を得ているものは多くない。公的・学術的文章として頻繁に使われる熟語は文学作品における修辞法を踏襲しているものが多く、文章はいわゆる美辞麗句を並べたような古典的な文語表現になってしまう。そのため論理的な文章を書く場合は外国語（主にロシア語）の表現をそのまま直訳したような文体にならざるを得ず、ウズベク語独自の表現の発達を妨げる結果となっている。

このような状態は、1930年代から形成されてきたとされるいわゆる標準ウズベク語が現在においてもまだ形成途中で過渡期にあるということの意味する。正発音法辞典も1970年代後半になるまで出版されず、そこでさえも感覚に基づいて編集した部分もあるので最終的な責任は取れないと序文に明記されている。ソヴィエト時代には各民族の共通語・国際語という位置づけをされたロシア語を用いることで公文書の表記は事足りてしまっていたという事情を考慮するとしても、国家的に標準語の発音の問題に取り組んでこなかった政府にも大きな責任があるだろう。

○ウズベク語史の整理

このような文章語がもたらされた背景を知るためには、この地域の言語政策史を振り返る必要がある。ウズベキスタン社会主義共和国（1924-1991）は、1924年の中央アジア国境画定により誕生したソヴィエト連邦内の共和国のひとつであった。それまでこの地域はロシア帝国領時代を経て革命後にはトゥルキスタンと呼ばれた広大な自治共和国の一部であり、言語も民族も多様を極めた地域であった。しかしこの国境画定により国家建設が始まると、ウズベキスタンとそこに住む人々は中央アジアの他の共和国（カザフスタン、キルギスタン、トゥルクメニスタン、後にタジキスタンがウズベキスタンから分離）や自治共和国、およびそこに住む民族とは別の文化・歴史を持つ地域、民族であると自他共に少しずつ認識していくことになる。国境画定は民族別共和国を作るといった目的のものであったが、多様な民族や部族、または所属意識が混在するこの地域を民族別に分けるとするのはそもそも無理であった。例えば移住などを経て結果的にウズベクとタジクに分断されることになるブハラ市の出身者は、同じ市の出身でありながらそれぞれウズベク人、タジク人として生きていくことになった。このように、それまでの領域概念が完全に崩れて様々な民族・言語を抱えたままの共和国内で、あるべきウズベク像がさまざまに模索されたのである。

国家枠組概念の強度を高めるという意味で、同質言語を共有することに繋がる標準ウズベク文章語と正書法の決定は重要な意味を持っている。新たに誕生した連邦内の共和国では標準語の制定が急務とされた。しかしウズベキスタンを3つの方言自治区（カルルク・キプチャク・オグズ）に分けるといった提案をした学者がいたように、ウズベキスタンにおける当時の話し言葉である諸方言は地域ごとに大いに異なっていた。さらにトゥルキスタンで用いられていた文章語も、啓蒙主義者の広めた「共通トルコ語」とタタール人知識人が独自に使い始めた「タタール語」、そして伝統的な「チャガタイ語」が混在しているという状況であった。ウズベク語教育にしても、「ウズベク人」「ウズベク語」という呼称は古くからあるものの、ウズベク語が母語として認識され始めるのは1920年代に入ってからである。それまでロシア語とともにトルコ語が国家語に制定されていたので国語教科書は「トルコ語」と表記されていた。公的な決定が何もなかった1920年代は、多様な方言が存在する中でどのような言語を「ウズベク語」とするのかという大

きな問題は教育者個人の裁量に委ねられ、相互に相当の差異が存在した。また識字率は1割程度で、教育制度も整備されていなかった。

このような中でウズベク標準語・正書法が次第に整備されていくが（年表参照）、文字もソヴィエト時代の70年間だけでアラビア文字からラテン文字、キリル文字と変化し、さらにソ連邦崩壊を経て独立した後は再度ラテン文字化することになる。これらの表記文字の変更による教育や出版分野での非効率性は当然ながら明らかであり、世代によって読解可能な文献が限られてしまうことによる知識伝達の可能性の低下は言うまでもない。しかし中央アジアやカフカスのチュルク民族の共和国のほとんどがこのような言語変遷史を共有していることを考えるならば、単にウズベキスタン内部の問題として考えることはできず、ソヴィエト言語政策として扱う必要がある。1922年の時点で既にモスクワではチュルク民族へのラテン文字導入が検討されており、1924年にはアゼルバイジャンでラテン文字が導入された。その後1926年のバクーにおける全連邦チュルク学会議でラテン文字化は正式に既定方針となり、同年ウズベキスタンでもラテン化に向けた執行機関である新アルファベットウズベク中央委員会が発足している。

1930年代は1920年代とは違って学校制度も整備されて識字率も向上し、出版制度も整って公的な教科書をはじめとして多くの出版物が発行されるようになる時期である。文献収集の結果1926年のバクー会議およびその後のウズベク正書法諸会議の速記録と決議録を入手することができたので、留学中にはこのラテン文字化の時代（1929-1939）に主に焦点を当てて研究を進めた。バクーの会議ではラテン化に関する多くの合意がなされ、ウズベキスタンにおけるラテン文字化および正書法の制定も多くがここでの合意を踏襲していた。1929年にはウズベク標準語における諸方言の尊重およびチュルク系言語に共通する特徴である母音調和の保持が決議されている。しかし5年後の1934年に改正された正書法では都市の方言の採用と使用する母音数の減少が決められ、結果としてウズベク標準語は母音調和の規則を失うことになった。1929年の正書法会議では標準語の候補としてさまざまな地方からの出席者によって多くの意見が表明され、それらをまとめきれずにどの方言の表現でも標準語になりうるという諸方言の尊重が決議されているが、1934年には全く別の決議がトップダウンで採択されていたのである。6年後の1940年にはラテン文字が廃止されてロシア語と同じキリル文字が導入されることになるが、母音調和の欠如などの現代ウズベク標準語の大まかな枠組みはこの1934年の正書法会議の決議に負うところが大きい。

<正書法の改正と文字の変遷（年表）>

1921年	アラビア文字改良	33文字	
	①チュルク語の母音をよりの確に表現するための記号の使用		
	②アラビア語の文字バリエーションを除去		③アラビア語の単語に母音を導入
	④チュルク語では独自の音価を持たない特殊文字の除去		
1929年	ラテン文字導入	33文字1記号	①諸方言の尊重 ②母音調和の保持
1934年	ラテン文字改良	30文字1記号	①都市方言の採用 ②母音調和の廃止 ③母音数の削減
1940年	キリル文字導入	33文字	
1956年	キリル文字改良	35文字	①細かな正書法を決定
1993年	ラテン文字導入	31文字1記号	
1995年	ラテン文字改良	26文字3複合文字	①1文字1音の原則を廃止 ②特殊文字の廃止

留学中には1929-1939年のラテン文字期の研究しかできなかったが、資料を持ち帰っているため今後はそれらの資料を駆使し、以下のような研究が可能であると考えている。

①1920年代の西トウルキスタン（現ウズベキスタンを含む中央アジアの一部）におけるアラビア文字改良は、当時東トウルキスタンと呼ばれていた隣国の中国新疆ウイグル自治区におけるアラビア文字の使用に影響を与えている（ウイグル語はチュルク系言語の中で最もウズベク語に近い言語である）。ウイグルには正書法会議等の資料は残っておらず、ウズベクの正書法会議の精査によって現代ウイグルに残る変形アラビア文字の起源の解明に寄与することができる。

②ソ連邦期における中央アジア諸共和国の度重なる文字改革には中央であるモスクワからの影響があったと思われるが、どの程度具体的なものであったかははっきりしていない。例えばアラビア文字の改良はそもそもはじめからラテン文字導入を視野に入れたものであったという見方があるが、正書法会議の資料によってそれらの説を裏付けることができる。

③ソ連邦の崩壊に伴う独立後には、それまでのキリル文字からラテン文字への切り替えが行なわれた。しかしこのラテン文字は1930年代のラテン文字とは別のもので、以前のラテン文字を参考にしてはいないように思われる。2つのラテン文字化政策を比較することで、ソヴィエト期およびポスト社会主義期における文化政策の差異をよりはっきりした形で抽出することができ、現行文化政策の特徴を指摘することができる。

④現行のラテン文字化は、当初2000年までに完了する予定であった。しかし公文書は多くがいまだにロシア語で書かれ、街中の広告や表示もウズベク語ながらキリル文字が多く保持されている。そのため完全に切り替えるまでもう5年猶予することが決定されたが、2005年の今年、2010年まで再度5年の猶予期間を置くことになった。キリル文字の浸透度が高いため、おそらく将来的にはキリル・ラテンの二本立て正書法になることが予想され、そうなった場合キリルもしくはラテンの一方では表記できるがもう一方では表記できない文字とその発音をどうするかという正書法の問題が再燃するはずである。そのため、伝統的・歴史的な正書法の研究分析はどのような形であれ必要となると思われ、それらを通じて現政権がどのような形で以前の正書法史を参照していくのか（もしくはしないのか）という問題を論じることが可能になる。ソヴィエト時代と断絶し、独自の「ウズベク史」「ウズベク文化」を構築しようとする傾向の強い今の趨勢の中で、正書法をはじめ言語政策として今後どのような立場が公的に取られていくのかという視点は興味深いと思われる。

○おわりに

貴重な留学の経験をさせていただいてウズベク正書法諸会議の議事録をはじめとした貴重な資料を手できたこと、多くの研究者と交流し現地における研究動向を把握するとともに数々の示唆を得たこと、また現地語の学習の機会を与えられたことに対して、この場を借りて貴財団による援助と温かい励ましに深く感謝したい。

留学期間を通じた成果は、今のところ論文が1つと学術雑誌・商業誌における解説・総説等が3つであ

る。論文は1934年の第1回ウズベク語正書法学術会議の決議録に関するもので、ラテン文字化したウズベク語において他のチュルク諸語に特徴的な母音調和を廃止するという重大な決定をしたこの決議録を精査し、1929年に決議したばかりの正書法を改変する理由は今後のロシア語の語彙導入のためであることが決議録から濃厚にうかがわれると結論付けた。これは私にとって初めて書いた外国語の論文だったので、留学中の経験の中でも特に喜ばしいものとなった。

他には、現地事情紹介として首都タシュケントの公文書館と図書館について日本の学会誌に寄稿した。また以前の専門が日本近代文学であったことから、タシュケント東洋学大学大学院で日本語史の授業を1学期間担当し、全12巻の予定で現在刊行中の『ウズベキスタン国家百科事典』編集者に日本文学に関する2項を任されて執筆した。留学中に執筆要請を受けたため、修士論文で扱ったウズベキスタンにおける近代演劇に関する調査も計画外のものとして一時期行なった。それらをまとめたものは朝倉書店刊『新世界地理 第5巻』に掲載予定である。

これらにとどまらず、今回の留学の成果としてさらにいくつかのものを発表する予定がある。留学中に得ることのできた資料や人脈等はこれからも活用して新たな成果に結びつけることができるものであり、このような機会を与えてくださった貴財団には改めて御礼を申し上げたい。

出版物による成果（論文・解説等）

- 1 Исследование о резолюции первого научного съезда по вопросу орфографии узбекского языка 1934 года (1934年第1回ウズベク語正書法学術会議決議録の分析) «Филология Масалалари» (『人文学の諸問題』) 3-4号 2004 (ロシア語)
- 2 「ウズベキスタン共和国タシュケントにおける公文書館および図書館の利用について」『日本中央アジア学会報』第1号 2005
- 3 Футабатэй Симэй (二葉亭四迷) および Хотта Ёсиэ (堀田善衛) の項 «Ўзбекистон Миллий Энциклопедияси» (『ウズベキスタン国家百科事典』) 第9巻 2005年5月刊行予定 (ウズベク語)
- 4 「ウズベキスタンの近代演劇」『新世界地理 第5巻 アジアV・中央アジア』(朝倉書店) 第7章・第2節 2005年11月刊行予定

口頭発表

「現代ウズベク標準語とその普及」第7回日本中央アジア学会 (まつぎきワークショップ) 2005

現地への貢献

2004年1月～2004年7月

ウズベキスタン共和国タシュケント東洋学大学大学院言語文学研究科 非常勤講師 (日本語史担当)

以上